

中心聖句：コリント第一 15:3-4

根本では一致を、それ以外には自由を、すべてにおいて慈愛を

「15:3 私があなたがたに最もたいせつなこととして伝えたのは、私も受けたことであって、次のことです。キリストは、聖書の示すとおりに、私たちの罪のために死なれたこと、15:4 また、葬られたこと、また、聖書の示すとおりに、三日目によみがえられたこと、」

皆さんおはようございます。記念日おめでとうございます！今日は大阪インターナショナルチャーチの47周年記念日です。少し時間をとって、私のこの教会での歩みと、なぜ私にとってOICが特別なのかお話ししましょう。私が初めてOICを訪れたのは、創立18年目の1992年の夏でした。すぐに私はOICが大好きになりました。そこは、興味深いほどに多様な背景を持った福音派クリスチャンたちが主を礼拝し、主との歩みにおいて互いを励まし合うべく集う場だったのです。ここに来た当初は、私は人里離れた場所に1年間ほど住んでおり、交わりに飢え渴きを感じていました。ここOICでは兄弟姉妹と交わることができ、当時就任したての牧師は、聖書を教える賜物に満ちた方でした。様々な背景を持つ人たちの集団ですから、クリスチャン教理や慣習に関することでそれぞれが異なる理解を持っているのは当然です。けれども、信仰の基本において、つまり聖書の権威、イエス・キリストへの信仰による救い、三位一体そしてキリストの死と復活という福音主義の信念においては一致しています。

1990年代は、毎年OIC創立記念日でこの教会がどのように創立されたのかを聞くのが楽しみでした。1970年代にはそのような教会はなかったため、日本人の牧師とビジネスマンのグループが、大阪に英語を主言語とする教会を始めたいと思ったのです。彼らは、教会の牧師となるべくアメリカ人宣教師のジャック・マーシャルを招聘しました。英語を話す大阪周辺のクリスチャンたちには、交わりと互いの励ましの場が必要だと確信していたのです。それはまさに私のことで、OICと出会い、交わりにあずかることは幸せでした。広い心を持ちつつも、教理においては徹底的に福音的なグループを見つけたのですから。ですから今日、クリスチャン信仰の基本について、クリスチャンに人気のある標語に沿ってお話したいと思います。今日のメッセージのタイトルはこの標語から取りました。

「根本では一致を、それ以外には自由を、すべてにおいて慈愛を。」

根本、つまりクリスチャン信仰の基本的教理では、私たちは一致すべきです。この基本的教理についてはこの後お話しします。そしてそれ以外にも重要な教理や慣習がありますが、その詳細については真のクリスチャンの間でも意見が分かれます。その場合には、全員が全てにおいて同意することはないと認識した上で、互いにある程度の余裕と自由を与えなければなりません。それでも互いに友なるクリスチャンであると受け入れるのです。最後の「すべてにおいて慈愛（愛）を」にあるように、違いについて論じる中でもお互いを愛さなければいけません。

パート 1: 根本では一致を

では、私たちが一致すべき絶対に不可欠な教理を見ていきましょう。

エペソ 4:3-6 「4:3 平和のきずなで結ばれて御霊の一致を熱心に保ちなさい。4:4 からだは一つ、御霊は一つです。あなたがたが召されたとき、召しのもたらした望みが一つであったのと同じです。4:5 主は一つ、信仰は一つ、バプテスマは一つです。4:6 すべてのものの上であり、すべてのものを貫き、すべてのもののうちにおられる、すべてのものの父なる神は一つです。」

もう一度 3 節を見てみましょう。「平和のきずなで結ばれて御霊の一致を熱心に保ちなさい」

エペソ 4:11-13 「4:11 こうして、キリストご自身が、ある人を使徒、ある人を預言者、ある人を伝道者、ある人を牧師また教師として、お立てになったのです。 4:12 それは、聖徒たちを整えて奉仕の働きをさせ、キリストのからだを建て上げるためであり、 4:13 ついに、私たちがみな、信仰の一致と神の御子に関する知識の一致とに達し、完全におとなになって、キリストの満ち満ちた身たけにまで達するためです。」

13 節「ついに、私たちがみな、信仰の一致と神の御子に関する知識の一致とに達し、」です。

クリスチャンの教えのゴールは：私たちみな御子を知り、信仰において一致することです。しかし悲しいことに、クリスチャン教会はきちんと一致してきたとは言えません。教理や慣習に関する多くの問題によって分断されてしまっているかのようです。けれども、教派を超えた協力や受容を多く目にするのも事実です。クリスチャンの信仰とメッセージの基盤となる、核となる信念がいくつかあります。様々な教派の、聖書を信じる全てのクリスチャンたちが分かち合う核となる信念です。今日の説教では、過去 2000 年の教会の歴史の中でクリスチャン教会が作成してきた重要な資料に示された核となる信念を概説しましょう。古代教会の重要な 2 つの信条、使徒信条とニカイア信条を見ていくと共に、ただ信仰による救いの教理を宗教改革が強調した点に注目しつつ、OIC でも支持しているような典型的な福音派の信仰宣言を見ていきたいと思えます。古代の信条を見ていく前に、コリント第一 15:3-4 に使徒パウロによって書かれた信条的宣言を見てみましょう。

「15:3 私があなたがたに最もたいせつなことからして伝えたのは、私も受けたことであって、次のことです。キリストは、聖書の示すとおりに、私たちの罪のために死なれたこと、 15:4 また、葬られたこと、また、聖書の示すとおりに、三日目によみがえられたこと、」

パウロは自分が学んだことを伝えました。何よりもまず「キリストが私たちの罪のために死なれた」という基本的教理、これがキリスト・イエスの福音の重要メッセージです。

最後の晩餐の場面を覚えておられますか？イエスはマタイ 26:26-28 でこう言われました。

「26:26 また、彼らが食事をしているとき、イエスはパンを取り、祝福して後、これを裂き、弟子たちに与えて言われた。『取って食べなさい。これはわたしのからだです。』 26:27 また杯を取り、感謝をささげて後、こう言って彼らにお与えになった。『みな、この杯から飲みなさい。 26:28 これは、わたしの契約の血です。罪を赦すために多くの人のために流されるものです。』」

旧約のいけにえの制度は、その将来にキリストが私たちの罪のために犠牲となることの描写でした。ですから、十字架にかかる前夜、イエスはこの地に来られた主な目的を弟子たちにお示しになりました。28 節「これは、わたしの契約の血です。罪を赦すために多くの人のために流されるものです。』 イエスの犠牲的な死は、私たちの罪の赦しのためなのです。

ヨハネ第一 2:2 「2:2 この方こそ、私たちの罪のための——私たちの罪だけでなく、世全体のための——なだめの供え物です。」

「なだめ」とは、非常に大きな言葉で、言い表すにも少し複雑です。私の聖書の注釈は「罪を償うことで神と和解する手段」と定義しています。私の ESV スタディバイブルには「罪は神の御怒りをもたらす...罪の完全なる供え物として、イエスは神の御怒りを遠ざけた」とあります。

「イエスは神の御怒りを遠ざけた」

これが、キリストが私たち人間の身代わりに死なれたという「身代わりの贖い」の教理です。この1つの教理だけでも1回分の説教もしくはもっと時間を費やすことができる話題ですが、今日は簡単に主要教理のあらましを説明します。

もう一度コリント第一 15 章 3 節の後半を見てみましょう。

「キリストは、聖書の示すとおりに、私たちの罪のために死なれたこと、」そして 4 節も「また、聖書の示すとおりに・・・」と結んでいます。

ルカ 24 章 44-48 節で、イエスが復活の直後に弟子たちに言われたことを見てみましょう。

「さて、そこでイエスは言われた。「わたしがまだあなたがたといっしょにいたころ、あなたがたに話したことばはこうです。わたしについてモーセの律法と預言者と詩篇とに書いてあることは、必ず全部成就するということでした。」45 そこで、イエスは、聖書を悟らせるために彼らの心を開いて、46 こう言われた。「次のように書いてあります。キリストは苦しみを受け、三日目に死人の中からよみがえり、47 その名によって、罪の赦しを得させる悔い改めが、エルサレムから始まってあらゆる国の人々に宣べ伝えられる。48 あなたがたは、これらのことの証人です。」

イエスは、聖書が理解できるよう彼らの心を開きました。(1)モーセの立法 (2)預言者 (3)詩編これが旧約聖書を構成する3つです。イエスは、メシアが来て、苦しみ、死に、そして3日目によみがえられると預言された箇所を、旧約聖書を通していくつもお示しになりました。聖書は、クリスチャンにとって根底にある権威です。それは、神、神が人間に用意された計画、救いの道、将来の行方について私たちが学ぶ場です。私たちの信仰宣言のように、多くの信仰宣言においてこれが明言されています。

OIC の信仰宣言の第一段落目

「私たちは、旧約、新約聖書ともに、原文に誤りのない、神の靈感による神の言葉であり、人類の救いという神の御心の完全なる啓示であり、すべてのキリスト者の信仰とその人生に対して、神聖かつ最高権威を持つものである、と信じる。第2テモテ 3:16」

これは、宗教改革の礎石の1つで、「聖書のみ」という意味を持ち、ラテン語で「ソラ・スクリプトラ」と表現される原理を反映しています。聖書は私たちの最高権威であり、それは神と神の救いの計画について私たちが知っていることの基礎を形成しています。

宗教改革に触れましたから、少し時間を取りましょう。私たちの教会は、プロテスタントと福音派の伝統の一部です。宗教改革の2つ目の原理は、ラテン語で「ソラ・フィデ」で、「信仰のみ」という意味です。私たちはただ信仰によって救われました。行いにはよりません。マルティン・ルターはローマ人への書簡を勉強していてそれに気づきました。

ローマ 1:17 「1:17 なぜなら、福音のうちには神の義が啓示されていて、その義は、信仰に始まり信仰に進ませるからです。「義人は信仰によって生きる」と書いてあるとおりです。」ここで使徒パウロは、旧約聖書のハバクク書「正しい人はその信仰によって生きる。」から引用しています(ハバクク 2:4c)。

「その義は、信仰に始まり信仰に進ませる・・・」信仰によって、最初から最後まで、始まりから終わりまで。信仰が中心です。行いでも、宗教的義務でも、善行でもありません。

使徒パウロがガラテヤ 3:11 で書いたことを見てみましょう。

「3:11 ところが、律法によって神の前に義と認められる者が、だれもいないということは明らかです。「義人は信仰によって生きる」のだからです。」

私たちが救われるのは立法の働きではなく、信仰によるのです。

「ソラ・グラティア」恵みのみ。

宗教改革の3つ目の原理は「ソラ・グラティア」で、「恵みのみ」です。

エペソ 2:8-9 「2:8 あなたがたは、恵みのゆえに、信仰によって救われたのです。それは、自分自身から出たことではなく、神からの賜物です。2:9 行いによるものではありません。だれも誇るものがないためです。」神の恵みによって、信仰を通して私たちは救われるのです。

コリント第一 15 章のパウロの信条的宣言に戻ってみましょう。

「15:3 私があなたがたに最もたいせつなこととして伝えたのは、私も受けたことであって、次のことです。キリストは、聖書の示すとおりに、私たちの罪のために死なれたこと、」

4 節「また、葬られたこと、また、聖書の示すとおりに、三日目によみがえられたこと、」

宗教的指導者たちが「しるしをください。そうすれば信じます」とイエスに頼んだ時にイエスが言われたことを覚えておられますか？マタイ 12 章 38-40 節でイエスはこう言われました。

「12:38 そのとき、律法学者、パリサイ人たちのうちのある者がイエスに答えて言った。「先生。私たちは、あなたからしるしを見せていただきたいのです。」12:39 しかし、イエスは答えて言われた。「悪い、姦淫の時代はしるしを求めています。だが預言者ヨナのしるしのほかには、しるしは与えられません。12:40 ヨナは三日三晩大魚の腹の中にいましたが、同様に、人の子も三日三晩、地の中にいるからです。」

キリストは死なれ...葬られ...そして三日目に死からよみがえられた。毎年イースターの時期は、この素晴らしい話を何度も耳にします。キリストの処刑と埋葬の後、安息日が明けてから女たちは墓にやってきました。

ルカ 24:1-8 「24:1 週の初めの日の明け方早く、女たちは、準備しておいた香料を持って墓に着いた。24:2 見ると、石が墓からわきどころがしてあった。24:3 入って見ると、主イエスのからだはなかった。24:4 そのため女たちが途方にくれていると、見よ、まばゆいばかりの衣を着たふたりの人が、女たちの近くにきた。24:5 恐ろしくなって、地面に顔を伏せていると、その人たちはこう言った。「あなたがたは、なぜ生きている方を死人の中で探すのですか。24:6 ここにはおられません。よみがえられたのです。まだガリラヤにおられたころ、お話しになったことを思い出さない。24:7 人の子は必ず罪人らの手に引き渡され、十字架につけられ、三日目によみがえらなければならない、と言われたでしょう。」24:8 女たちはイエスのみことばを思い出した。」

イエスが死からよみがえられたことがなぜそんなに重要なのでしょうか？それは、イエスが死に打ち勝ったことを意味し、私たちのからだをも死からあがってくださるという約束だからです。

コリント第一 15:20-26 「15:20 しかし、今やキリストは、眠った者の初穂として死者の中からよみがえられました。15:21 というのは、死がひとりの人を通して来たように、死者の復活もひとりの人を通して来たからです。15:22 すなわち、アダムにあってすべての人が死んでいるように、キリストによってすべての人が生かされるからです。15:23 しかし、おのおのにその順番があります。まず初穂であるキリスト、次にキリストの再臨のときキリストに属している者です。15:24 それから終わりが来ます。そのとき、キリストはあらゆる支配と、あらゆる権威、権力を滅ぼし、国を

父なる神にお渡しになります。15:25 キリストの支配は、すべての敵をその足の下に置くまで、と定められているからです。15:26 最後の敵である死も滅ぼされます。」

26節をもう一度「最後の敵である死も滅ぼされます。」これは素晴らしい知らせです。キリストは私たちの罪の贖いとして十字架にかけられました。そして預言された通り三日目によみがえられました。イエスは死に打ち勝ち、終わりの時に私たちをもよみがえらせてくださるのです。

これは、有名な東方正教会の復活の聖画像です。よみがえられたキリストが壊れた墓に立ち、死に対するイエスの勝利を表しています。イエスはご自身が打ち壊したハデスの門に立ち、死を克服したことがわかります。2つの壊れた門が、十字の形になっているのがお分かりですか、それは、十字架が死に打ち勝つためにイエスが使った手段だったからです。そしてイエスはアダムとエバを墓から引き上げています。彼らは、禁じられていた実を食べる選択をしたことで人間を罪と死に陥れた二人の男女です。けれども今や死は打ち負かされ、信者たちは永遠のいのちの約束を受け取ります。



次に、使徒信条と呼ばれる古い信条を見てみましょう。これは最も基本的で、クリスチャン信仰の最も重要な教理を表現しています。キリスト教に改宗した人はこの信条を支持し、洗礼の際には朗読されました。

使徒信条

わたしは、天地の造り主（つくりぬし）、全能の父なる神を信じます。

わたしは、そのひとり子、わたしたちの主、イエス・キリストを信じます。主は聖霊によってやどり、処女（おとめ）マリアから生まれ、ポンティオ・ピラトのもとで苦しみを受け、十字架につけられ、死んで葬られ、陰府（よみ）にくだり、三日目に死者のうちから復活し、天に昇って、全能の父なる神の右に座しておられます。そこから来て、生きている者と死んでいる者とを審（さば）かれます。

わたしは、聖霊を信じます。聖なる公同の教会、聖徒の交わり、罪の赦し、からだの復活、永遠（えいえん）のいのちを信じます。

アーメン

— 日本聖公会「祈祷書」より

「わたしは、天地の造り主、全能の父なる神を信じます。」

創世記1:1 「1:1 初めに、神が天と地を創造した。」

「わたしは、そのひとり子、わたしたちの主、イエス・キリストを信じます」

ヨハネ3:16 「3:16 神は、実に、そのひとり子をお与えになったほどに、世を愛された。それは御子を信じる者が、ひとりとして滅びることなく、永遠のいのちを持つためである。」

「主は聖霊によってやどり、処女（おとめ）マリアから生まれ、」

この話はルカ1章で語られています。キリストが聖霊によってやどり、おとめから生まれたということはクリスチャン信仰にとって重要です。これはOICの信仰宣言にも採用されています。

「ポンティオ・ピラトのもとで苦しみを受け、」

ローマ帝国の総督の名前が4つのすべての福音書と使徒言行録に現れます。ポンティオ・ピラトのもとでのキリストの処刑は、ローマ歴史家のタキトゥスによっても記録されています（年代記15.44）。キリストの処刑は、空間的にも時間的にも実際に起こった本当の出来事です。

「十字架につけられ、死んで葬られ、陰府（よみ）にくんだり、三日目に死者のうちから復活し、天に昇って、」
ルカ24章と使徒言行録1章に、イエスが復活して弟子たちに現れた後、天に昇られたとあります。

「全能の父なる神の右に座しておられます。そこから来て、生きている者と死んでいる者とを審（さば）かれます。」
ヘブル10:12「10:12 しかし、キリストは、罪のために一つの永遠のいけにえをささげて後、神の右の座に着き、」
生きている者と死んでいる者の最後の審判について、ヨハネの黙示録など数か所で書かれています。

使徒信条はこう締めくくっています。「わたしは、聖霊を信じます。聖なる公同の教会、聖徒の交わり、罪の赦し、からだの復活、永遠（えいえん）のいのちを信じます。アーメン」
ここにある「公同の教会」とは、英語では「カトリック教会」となっていますが、これはローマカトリック教会のことではなく、単純に世界中のクリスチャン信徒のからだを示しています。私たちはからだの復活と創造主との永遠のいのちを楽しみにするのです。

ここにクリスチャン信仰の重要教理のほとんどが凝縮されています。私たちがクリスチャンとして支持する基本的な教理です。

4世紀には、もう一つの信条が作成されました。東方教会で使われていた洗礼に関する信条が発展したものだと思います。この信条が必要になったのは、イエス・キリストは完全に神であったのかと疑問を持ったアリウスという説教者がきっかけでした。彼の一番よく知られた声明は「神の子が存在しなかった時があった」です。神の御子は創造されたため、起点を持っていたとアリウスは唱えました。ですから、イエス・キリストは御父と同等の神ではないというのです。この説教が多くの問題を引き起こしたため、この問題について話し合うため、325年に公会議が招集されました。議会はニカイアという町で行われ、その議会で、ニカイア信条と呼ばれるものが作られたのです。この信条はイエス・キリストの完全なる神性を断言しています。

その後、381年に他の議会在が招集され、コンスタンティノポリスで開かれました。この議会で、聖霊の完全な神性と性質が確認されました。三位一体の第三の位格を含むためにニカイア信条の最後の部分が拡張されました。パワーポイントのスクリーンで、ニカイア信条を表示しています。ニカイア・コンスタンティノポリス信条と呼ばれることもあります。

ニカイア信条 (ニカイア・コンスタンティノポリス信条)

我は唯一の神・全能の父・天地とすべて見ゆる物と見えざる物の造り主を信ず
我は唯一の主イエス＝キリストを信ず。主はよろず世の先に、父より生まれたるひとりの御子、神よりの神、光よりの光、まことの神よりのまことの神、造られずして生まれ、父と一体なり。よろずのもの主によりて造られたり。主はわれら人類のため、また我らを救わんがために、天よりくんだり、聖霊によりておとめマリヤより肉体を受け、人性をとり、我らのためにポンテオ＝ピラトのとき、十字架につけられ、苦しみを受け、葬られ、聖書にかないて三日目によみがえり、天に昇り、父の右に座したまえり。また栄光をもって再びきたり、生ける人と死ぬる人をさばきたまわん。その国は終わることなし

我は聖霊を信ず。聖霊は命を与うる主、父と子よりいで、父と子とともに拝みあがめられ、預言者によりて語りたまひし主なり。我は使徒たちよりの唯一の聖公会を信ず。罪の赦しをうる唯一の洗礼を信認す。死にし人のよみがえりと来世の命をのぞむ

アーメン

— 『日本聖公会祈祷書(1959年版)』より

この信条全てはここでは読みませんが、ここでは使徒信条に出てきた三位一体のそれぞれの用語が拡張されているのがわかると思います。イエス・キリストが「父より生まれたるひとりの御子、神よりの神、光よりの光、まことの神よりのまことの神、造られずして生まれ、父と一体なり。」と表現されていることに注目してください。三位一体の教理はクリスチャン信念の礎石の1つです。三位一体のそれぞれ、父なる神、御子、聖霊の完全なる神性と性質は神と救いの道に関する聖書の教えを完全に理解するためにきわめて重要です。

ここで、私の霊的な旅路について少しお話ししましょう。ルーテル教会の日曜学校で素晴らしい基本を学んだことについては以前お話ししました。サンディエゴに引っ越しした後、すぐには良い教会を見つけられなかったのですが、母がもともとペンテコステ派だったので、最終的にペンテコステ系の教会に行きつきました。その教会も最初は良かったのですが、数年経って2回牧師が代わり、教会の雰囲気が変わってきました。そして私の気持ちも薄れてしまいました。それは私が十代の頃、全てについて疑問を持ち始める時期でした。私はまだ自分がキリストに従う決心ができていないと分かっていました。そんな時私の双子の兄がカリフォルニア大学ロサンゼルス校に行くために家を出ました。私の兄は敬虔なクリスチャンで、すぐにクリスチャングループに参加しました。彼はジョン・マッカーサー師の教会を紹介され、私も最終的にそこを訪れることとなります。そこは大変すばらしいところで、マッカーサー師の詳細な1節ごとの聖書解説に感銘を受けました。マッカーサー師は、それぞれの言葉の意味と、その聖句が他の御言葉とどのように適合していくのかを知るために、学ぼうとする各聖句の文脈をいつも見るよう気を付けなさいと教えていました。（特に言語のギリシャ語やヘブライ語が分かっていると良いと。）

大学も二年目になると、キャンパスからもっと近い別の教会に参加していました。そしてそこが、キリストを自分の救い主として受け入れますかという招きにに応じて私が前に歩み出た場所でした。1979年のしゅろの主日、それが私の霊的誕生日です。私は既に聖書を一度通読したことがあり、もう一度通読したいと熱望していました。そんな中、夏休み中に私がサンディエゴの実家に戻った時、2人の男性がうちを訪れました。彼らは、私に聖書のことを教えたいと熱望する宣教師たちでした。彼らが私に渡そうと2冊の本を取り出すと、その本がものみの塔から出版されている物だと私は気付きました。エホバの証人です。その本を手にとり、私は読みました。その本は「三位一体」という言葉は聖書の中に出てこないと指摘していました。ジョン・マッカーサー師があまりにも上手く教えていたためか、その頃私は聖書の御言葉だけにこだわろうという姿勢で、「伝統的」なだけで聖書にあまり基づいていないと感じることは排除する傾向にありました。もしも三位一体が聖書に書いてないなら、その教理は不要と判断すべきなのだろうか。

その時代は私にとって危険な時代だったと思いますが、私が読んでいたものみの塔の本が主張することを調べる方法はきちんと分かっていました。1つの主張は、ヨハネの福音書1:1で「神」の意味で使われているギリシャ語の言葉についてです。エホバの証人の主張は、この節はイエスを「God(神)」ではなく「a god(神々のうちの1つ)」だと言っているというものでした。4世紀にアリウスが「神の御子イエスには起点があったのだから父なる神と同等の神性ではない」と主張したように、エホバの証人も今日、キリストの完全なる神性を否定しています。ギリシャ語の新約聖書でヨハネ1:1を見たところ、彼らが言いたいことはわかりました。「神々のうちの1つ」であって父なる神と完全に同等の神性がないとも読めるかもしれません。しかし、ヨハネ1:1の彼らの解釈の仕方をヨハネの福音書の残りの部分に適用すると、全然意味が通じなくなることがすぐに分かります。この書全体的に彼らの解釈の原則をあてはめることはできないのです。ですから私は彼らのヨハネ1:1の解釈は誤りであると結論づけました。それが私の学んだことの1つ目です。

2つ目に学んだことは、「主」という言葉についてです。私は、旧約聖書のギリシャ語訳である七十人訳聖書しちじゅうにんを見てみました。言語のヘブライ語で「Adonai(アドナイ)」「Yahweh(ヤハウエ)」と言う言葉が出てくるところでは、七十人訳聖書ではギリシャ語で「主」を意味する「Kurios」が頻繁に使われています。新約聖書で旧約聖書が引用され、それをイエスに対して適用する時は、こ

のギリシャ語の「Kurios」が何度も用いられています。言語のヘブライ語「yahweh」が使われることもあります。イエスはヤハウエの神と同等なのです。イエスは神、神格であり、完全に神であるのです。そして数週間の調査の結果、三位一体は非聖書的であるというエホバの証人の偽りの観念を捨て去ることができました。実際は、聖書にその言葉が出て来なくとも三位一体の考えは実に聖書に基づいています。聖書全体をとってイエス・キリストについて書かれていること全てを見れば、イエスが父なる神と同等の神格にあるのがわかります。聖霊についても同じです。

これらのこと全てから得た大きな学びは、私が生まれるよりもはるかに前からこのような神学的問題と向き合った信仰の父祖たちを信頼しなければならないということでした。教会の歴史の初期には、古代教会の父たちはこれらの問題について話し合い、その結論が私たちに引き継がれています。自分が得た教理をコリント第一 15 章でパウロが引き継いだのと同様の方法です。クリスチャンの福音の絶対的基本教理の強固な宣言として、私は使徒信条とニカイア信条がとても好きになりました。以前の私の「聖書だけ」という態度は、狭すぎて単純すぎるものでした。クリスチャン信仰の重要な概念を伝えてくれた父祖たちを信頼すべきなのです。

この中に重要な教理があります。この教理は、クリスチャンと呼ばれたければ受け入れなければならないものです。これはバプテスト派、長老派、ルーテル派、聖公会、メソジスト派、メソナイト派、ペンテコステ派、同胞教会、ホーリネス教団、カルバリーチャペル、その他の教派で共通の根本的教理です。私たちの内に違いがあっても、互いにクリスチャンであると認識するのです。これらの重要な部分を受け入れていないために排除されるグループもあります。エホバの証人、モルモン教、ユニテリアン派などです。

パート 1 も終わりに近づいてきました。その前にもう 1 つの考えを見てみましょう。「教理と慣習」です。私たちが一致すべき重要な教理のほかに、生き方において重要な要素もあります。私たちは罪から救われたのですから、いかなる罪深い行動や態度も捨てるよう努力しなければなりません。旧約聖書でも新約聖書でも、罪を悔い改め、神に立ち返り従うように促されています。完全にはできなくても、そうできるように熱望し、失敗した時には苦しさを覚えるべきです。この話題だけでも一回分の説教ができますが、次に行きましょう。

今日のメッセージは、先ほど引用した次のクリスチャン標語に沿っています。

「根本では一致を、それ以外には自由を、すべてにおいて慈愛を」

次はパート 2 : それ以外には (根本でなければ) 自由を

当初は今日の説教の三分の二をパート 1 に、三分の一をパート 2 に費やそうと思っていましたが、信仰の重要教理について概説するのにほとんどの時間を割いてしまいましたので、残された 10% の時間でパート 2 をお話することになります。

この「根本でなければ自由を」というフレーズの要点は、確かに聖書の中に含まれていて大切に、非常に重要な教理や慣習であっても、どのように解明し実践するべきかの詳細については異なる意見が存在します。そのような問題に関して、間違った考えを持っている相手があることについて考えを変えるように議論し、説得することもあるかもしれませんが、だいたいの場合、ずっと持っている信念を手放すのは難しいものです。また、自分こそが誤っているかもしれない可能性にも注意すべきです。このように意見が分かれる時は、異なる意見を持つクリスチャン兄弟姉妹をそのまま受け入れるべきかもしれません。互いに慈悲深くいるべきなのです。

私が福音派の兄弟間で目にしたことのある教理上の意見の違いについて例示しようと思いましたが、時間が足りません。これらはすべて非常に議論が割れる話題なので、時間を費やしすぎるのもよくないので良しとしましょう。

1つ、今の私たちの状況だと比較的意見が分かれにくい例から挙げましょう。私がまだ若かりし頃、立法主義に関する議論が盛んでした。多くの教会には、聖書に則っていると信じるがゆえに存在する多くの行動ルールがあります。そのルールはこのようなものです：タバコを吸わない、酒を飲まない、踊らない、日曜日に働かない、映画に行かない、女性は化粧をしない、女性は教会にスカート（ワンピース等）を着用する等です。確かに私の母は実際に教会に行くときはスカート姿でした。もっと他にも立法主義的なルールがあったのですが忘れてしまいました。私は1970年代に成人しましたが、その時代は多くの説教者たちがそのようなルールは本当に聖書に基づいているのかと疑問を感じ始めていました。ジョン・マッカーサー師もそのうちの一人で、立法主義に反する説教をするのを何度か聞いたことがあります。彼の聖書中心の説教、聖書に裏付けられていない慣習に反した説教をする大胆さに私は感服していました。ローマカトリック教の、おとめマリアを崇拝する慣習に反論して説教したこともあります。また、あらゆる立法主義的要素や聖書的ではない聖書解釈をする原理主義の兄弟に対しても同じように対峙しました。

ローマ書14章を見てみましょう。クリスチャンとして何をするのが許されているかいないのか、何が行うべき義務なのかそうでないかについて兄弟間で意見が分かれる時の対処法を教えてください。この章では、市場で売られる肉が異邦人の儀式で偶像にささげられた肉かもしれないという理由で肉を食べるのを避けるクリスチャンがいることについてパウロが語っています。クリスチャンはそのような肉を食べるべきでしょうか？これは本当に重要な問題でしょうか？肉を食べるのを拒む人もいれば、問題ないと結論付ける人もいました。またユダヤ系クリスチャンには、安息日やその他の祭日を守り続けていて、同様にしていない信者を批判することがありました。

ローマ14:1-6「14:1 あなたがたは信仰の弱い人を受け入れなさい。その意見をさばいてはいけません。14:2 何でも食べてよいと信じている人もいますが、弱い人は野菜よりほかには食べません。14:3 食べる人は食べない人を侮ってはいけなし、食べない人も食べる人をさばいてはいけません。神がその人を受け入れてくださったからです。14:4 あなたはいつたいだれなので、他人のしもべをさばくのですか。しもべが立つのも倒れるのも、その主人の心次第です。このしもべは立つのです。なぜなら、主には、彼を立たせることができるからです。14:5 ある日を、他の日に比べて、大事だと考える人もいますが、どの日も同じだと考える人もいます。それぞれ自分の心の中で確信を持ちなさい。14:6 日を守る人は、主のために守っています。食べる人は、主のために食べています。なぜなら、神に感謝しているからです。食べない人も、主のために食べないのであって、神に感謝しているのです。」

この聖書箇所は大変魅力的だと思います。以前私は、聖書に基づいているか不確かな余計なルールを作る立法主義のクリスチャンにいら立つことがありました。しかしそういった人たちは正直な心を持ち、その狭い道を行くことで神を敬っていると考えていることに気づいたのです。

6節をもう一度「日を守る人は、主のために守っています。食べる人は、主のために食べています。なぜなら、神に感謝しているからです。食べない人も、主のために食べないのであって、神に感謝しているのです。」

その人はこれを全て主のためにしているのですから、それが聖書で求められている慣習ではないと私が思うことで相手を見下すべきではないのです。同じように、彼らが避けるべきだと思っていることを私がしようとする時、彼らも私を裁くべきではありません。

4節「14:4 あなたはいつたいだれなので、他人のしもべをさばくのですか。しもべが立つのも倒れるのも、その主人の心次第です。このしもべは立つのです。なぜなら、主には、彼を立たせることができるからです。」

聖書に明確に書かれていない事でクリスチャンの友に批判的にならないようにしましょう。また、より聖書の理解において成熟できるよう兄弟姉妹を優しく正し、導けるようにしましょう。

この話題について説教すると決めた時は、教派を超えて存在する教理上の違いをいくつか例示しようと思っていました。洗礼について（教派によっては小児洗礼を行うところもある）、コリント第一 12 章にあるカリスマ的な賜物は、異言も含めてすべて今でも存在するかどうかについて、キリストの千年王国についての考えについての意見の違い等です。こういった例の詳細をお話したかったのですが、時間がありませんので、20 代の時に私が学んだこととお話しましょう。

私は以前、新約聖書の原語、ギリシャ語を皆が吟味すれば、教理上の合意に達して教派の違いを消し去れると思っていました。しかしそれは単純すぎる考えでした。洗礼に関する問題で意見が分かれる両者とも、ギリシャ語に詳しい人がいるのに、それでも違う結論にたどり着いていることに気づいたのです。彼らはそれぞれしっかりと議論された聖書に基づく理由を持っているのです。カリスマ的賜物についても同じです。驚くべきは、様々な議論で異なる見解を持つクリスチャンたちの人生や働きの中でも、神が働かれるのが見えることです。神にとっては、私たちが神に対して忠実であり、クリスチャン信仰の絶対的要素を忠実に守ることが重要なのです。

今日のタイトルの標語に戻ってみましょう。

「根本では一致を、それ以外には自由を、すべてにおいて慈愛を」

私たちが一致すべき信仰の基本について概説しました。また、異なる教派の内に存在する教理上の違いについても例示しました。特定の教理についての理解が間違っているクリスチャンの兄弟姉妹を説得して、その教理について彼らがあなたと同じ立場を取るように導けることもあるでしょう。ですが、そうでなければ私たちの内の違いと共存しなければなりません。私は教派の境目を超えて神が働かれるのを見てきました。私たちにも確かにできるはずですが。私たちと意見が異なる兄弟姉妹も受け入れましょう。

もちろん、この原則において行き過ぎてはいけません。異端（偽の教理）に関しては、私たちはきちんと対処し排除しなければなりません。またクリスチャンだと言いながらも敬虔な生活を送っていない人が居れば、責め、悔い改めに召さなければなりません。けれども聖書を信じるクリスチャン同士で教理上の相違がある場合は、相手に自由と恵みを示していきましょう。

パート 3:すべてにおいて慈愛を

仲間のクリスチャンとのこういったやり取りにおいて、情け深く愛を示しましょう。

ローマ 14:13-15 に戻ります。「14:13 ですから、私たちは、もはや互いにさばき合うことのないようにしましょう。いや、それ以上に、兄弟にとって妨げになるもの、つまずきになるものを置かないように決心しなさい。14:14 主イエスにあつて、私が知り、また確信していることは、それ自体で汚れているものは何一つないということです。ただ、これは汚れていると認める人にとっては、それは汚れたものなのです。14:15 もし、食べ物の中で、あなたの兄弟が心を痛めているのなら、あなたはもはや愛によって行動しているのではありません。キリストが代わりに死んでくださったほどの人を、あなたの食べ物の中で、滅ぼさないでください。」

この聖句は教理というよりは慣習について話しているので、教理上の違いにローマ 14 章をあてはめようとする場合は注意が必要です。それでもこの節は、批判的な態度や、相手が自分と同じように聖書の命令を理解するように主張することによって仲間のクリスチャンが傷ついたり傷を負ったりする可能性があることを示しています。そうなれば私たちは愛の内に歩んではいません。

コリント第一 13:1-7 「13:1 たとい、私が人の異言や、御使いの異言で話しても、愛がないなら、やかましいどらや、うるさいシンバルと同じです。13:2 また、たとい私が預言の賜物を持っており、またあらゆる奥義とあらゆる知識とに通じ、また、山を動かすほどの完全な信仰を持ってい

ても、愛がないなら、何の値うちもありません。13:3 また、たとえ私が持っている物の全部を貧しい人たちに分け与え、また私のからだを焼かれるために渡しても、愛がなければ、何の役にも立ちません。13:4 愛は寛容であり、愛は親切です。また人をねたみません。愛は自慢せず、高慢になりません。13:5 礼儀に反することをせず、自分の利益を求めず、怒らず、人のした悪を思わず、13:6 不正を喜ばずに真理を喜びます。13:7 すべてをがまんし、すべてを信じ、すべてを期待し、すべてを耐え忍びます。」

ローマ 13:10 「13:10 愛は隣人に対して害を与えません。それゆえ、愛は律法を全うします。」

ペテロ第一 4:8 「4:8 何よりもまず、互いに熱心に愛し合いなさい。愛は多くの罪をおおうからです。」

最後に私の大好きな聖句で締めくくりましょう。

テモテ第一 1:5 「1:5 この命令は、きよい心と正しい良心と偽りのない信仰とから出て来る愛を、目標としています。」

この命令は、きよい心と正しい良心と偽りのない信仰とから出て来る愛を、目標としています。